

人間環境系学生の適応過程に関する縦断的研究 (その4)

A Longitudinal Study of the Adaptive Processes of Students in the Department of Human Environmental Studies

坂本 剛・高橋陽子・内藤 徹・中川直志・石崎保明

SAKAMOTO Go, TAKAHASHI Yoko, NAITO Toru, NAKAGAWA Naoshi, & ISHIZAKI Yasuaki

Abstract: This is the fourth report of a series of studies on the adaptive processes in the Department of Human Environmental Studies at Nagoya Sangyo University. In this report, based on our four-year-longitudinal research, brief summaries are also included in each section. Section 1 focuses on the concept of human environmental studies and points out some problems related to them. Section 2 suggests that students who major in the area of environmental psychology tend to understand what our university's environmental psychology is, whereas they are worried about the relationship between the field of study and jobs which they will take. Section 3 finds that the degree of importance for student's own university life at school entry affects later part of their school life. Section 4 shows that our students acknowledge the significance of English as a tool for international communication but nonetheless they are reluctant to advance their own English skills.

Keywords: human environment, environmental psychology, adaptive processes, international sensibility

0. はじめに⁽¹⁾

本研究の目的は、名古屋産業大学人間環境マネジメント学科に所属する学生の入学後の適応過程を縦断的に調査し、その調査を通じて人間環境という学際的領域のあるべき方向性を模索し、同時に教育へフィードバックしていくことである(内藤・中川・石崎・坂本・高橋, 2005; 中川・石崎・坂本・高橋・内藤, 2006; 石崎・坂本・高橋・内藤・中川, 2007)。これまでの調査は、第1回が2004年9月から10月にかけて同学科のI期生を対象に実施され、その後、第2回2005年4月、第3回2005年9月、第4回2006年4月、第5回2006年10月、そして第6回2007年4月とI・II期生を対象に行われている。本稿ではI期生の4年間にわたる調査結果をもとに総括を行う。第4回、あるいは第5回までを中心とした考察については上記先行報告を適宜参照いただきたい。

本稿は、本節および5節を内藤と坂本が担当した。第1節は人間環境全般について中川が担当している。第2節では環境心理領域のイメージや就職感について石崎が、第3節は坂

本が学生生活の適応について考察を行った。第4節の担当は高橋が国際性を中心に考察を行っている。本節および5節を除き、各節に対する執筆担当者は先行報告のそれと同じであり、編集上、各節の執筆においては執筆者の意向を最大限に尊重している点もそれと変わっていないことを断っておく。また、総括も独立した論考の中で行われる。

0節注

(1) 執筆担当: 内藤 徹・坂本 剛

0節引用文献

石崎保明・坂本剛・高橋陽子・内藤徹・中川直志 2007 人間環境系学生の適応過程に関する縦断的研究(その3), 環境経営研究所年報, 6, 19-45.

内藤徹・中川直志・石崎保明・坂本剛・高橋陽子 2005 人間環境系学生の適応過程に関する縦断的研究, 名古屋産業大学論集, 7, 67-77

中川直志・石崎保明・坂本剛・高橋陽子・内藤徹 2006 人間環境系学生の適応過程に関する縦断的研究（その2）、環境経営研究所年報，5，1-30.

欠かさずアンケートに回答してきた学生のものであったが今回提示するデータ（次節参照）は2006年度後期のアンケート調査に回答した全学生（27名）のものである。前回調査において初回から継続して回答してきた学生の数は一桁となり、今回の調査ではそれがさらに減少したことが最大の原因であるが、今回は本研究を総括するにあたり、学生全般の状況を観察することが有意義であると判断した。その一方で、前回報告までの調査結果を無視しなければならない理由はない。細かな数字は別としても、前回報告までに観察された学生の変容は、事実として、今回の分析にあたっても有意であり、今回提示する調査結果の分析もそれを踏まえたものとなる。

1. 人間環境に対する認識について⁽¹⁾

1.1. 調査結果

1.1.1. 調査の概要

本節においては2006年度後期に行われた人間環境に関するアンケート調査について、そのデータを提示し、分析を試みると共に、これまでの調査を総括したい。

人間環境に関するアンケート調査は2007年度前期まで行われたが、アンケート用紙の回収率が低く、また2006年度後期の調査に現れた傾向と大きな差は認められなかった。2006年度後期のアンケート回収は2007年までずれ込んでおり、専門課程進学後およそ1年を経過して、調査に現れる傾向はほぼ固定してきたと考えられる。2006年度後期をもって「縦断的研究」と銘打った本研究を総括するのは時宜を得たものと言えよう。

前回報告⁽²⁾まで提示してきた調査結果は、初回の調査から

1.1.2. 2006年度後期調査結果（I期生データ）

2006年度後期調査に回答したI期生27名の回答結果は以下の通りである。なお、表中の回答数の合計は必ずしも回答者数（あるいはその倍数、等）と一致しない。これは設問や選択肢によって無回答や複数回答が見られたためである。当然のことながら、無回答をデータに含めることはできない。しかし、複数回答を想定していない設問での複数回答（第一選択で複数の選択肢を回答した場合、等）についてはそれを積極的意思表示とみなし、データに算入している。

表 1-1 2006 年後期調査結果（I期生データ）

質問	A-1								
	「環境」という言葉を聞いてあなたがイメージすることは何ですか。（自由回答）								
	自然環境	インフラ	生活環境	家庭環境	人間関係	周囲	文化	その他	
選択数	20	0	4	1	3	1	0	3	
%	62.50	0.00	12.50	3.13	9.38	3.13	0.00	9.38	

*生活環境には建築としての家、社会環境を含む

質問	A-2									
	人間環境の例として思い浮かぶものを2つ以上挙げてください。（自由回答）									
	対人関係、心理	会社	政治	文化・歴史	生活環境	社会インフラ	家族	学校	自然環境	言語
選択数	15	2	0	0	5	2	4	1	6	0
%	42.86	5.71	0.00	0.00	14.29	5.71	11.43	2.86	17.14	0.00

質問	A-3									
	人間環境分野に分類される学問を2つ以上挙げてください。（自由回答）									
	心理学	環境心理	言語学	文化環境	家庭環境	環境学・自然環境	社会環境	福祉	人間環境学	経営学
選択数	5	8	1	2	2	2	0	0	1	0
%	23.81	38.10	4.76	9.52	9.52	9.52	0.00	0.00	4.76	0.00

	A-4		A-5					
	人間環境について学んでいる、あるいは学んだという実感がありますか。		本学での講義を受講してあなたの人間環境に対するイメージが変わりましたか。		解答パターン（A-4, (A-5)の順			
	(a) ある	(b) ない	(a) はい	(b) いいえ	(a)(a)	(a)(b)	(b)(a)	(b)(b)
選択者数	24	3	17	10	15	9	2	1
%	80.00	10.00	58.62	34.48	55.56	33.33	7.41	3.70

	A-6					
	(学問分野としての) 人間環境分野の中で最も興味ある分野は何ですか。(a)文化環境 (b)心理 (c)家庭環境 (d)言語環境 (e)その他 () (f) 人間環境分野の具体的内容がまだよくわからない。					
	(a)文化環境	(b)心理	(c) 家庭環境	(d)言語環境	(e)その他	(f)不明
選択者数	5	21	7	3	0	1
%	13.51	56.76	18.92	8.11	0.00	2.70

	A-7										
	(学問分野としての) 人間環境分野を学んだ学生らしい就職先として考えられる分野を2つ挙げてください（優先順に）。（第一選択）										
	建設・不動産、	製造	運輸	情報・通信	飲食業・宿泊	卸売・小売	金融	医療・福祉	教育	サービス	その他
選択数	2	0	1	1	1	0	0	11	6	2	1
%	8.00	0.00	4.00	4.00	4.00	0.00	0.00	44.00	24.00	8.00	4.00

A-7											
(学問分野としての)人間環境分野を学んだ学生らしい就職先として考えられる分野を2つ挙げてください(優先順に)。(第二選択)											
	建設・不動産	製造	運輸	情報・通信	飲食業・宿泊	卸売・小売	金融	医療・福祉	教育	サービス	その他
選択数	2	0	0	3	0	3	1	5	6	4	1
%	8.00	0.00	0.00	12.00	0.00	12.00	4.00	20.00	24.00	16.00	4.00

A-7											
(学問分野としての)人間環境分野を学んだ学生らしい就職先として考えられる分野を2つ挙げてください(優先順に)。(第一・二選択)											
	建設・不動産	製造	運輸	情報・通信	飲食業・宿泊	卸売・小売	金融	医療・福祉	教育	サービス	その他
選択数	4	0	1	4	1	3	1	16	12	6	2
%	8.00	0.00	2.00	8.00	2.00	6.00	2.00	32.00	24.00	12.00	4.00

A-6、A-7(第一選択)選択パターン

(a)文化環境	(a)文化環境	(a)文化環境	(a)文化環境	(a)文化環境	(a)文化環境	(a)文化環境	(b)心理	(b)心理	(b)心理	(b)心理	(b)心理	(b)心理	(b)心理	(b)心理	(b)心理	(c)家庭環境
(a)環境	(d)環境	(e)環境	(g)環境	(h)環境	(i)環境	(j)環境	(a)環境	(d)環境	(e)環境	(f)環境	(g)環境	(h)環境	(i)環境	(j)環境	(k)環境	(a)環境
建設・不動産、	情報・通信	飲食業・宿泊	金融	医療・福祉	教育	サービス	建設・不動産、	情報・通信	飲食業・宿泊	卸売・小売	金融	医療・福祉	教育	サービス	その他	建設・不動産、
0	1	1	0	0	2	0	1	0	0	0	0	11	5	1	1	2
0.00	2.94	2.94	0.00	0.00	5.88	0.00	2.94	0.00	0.00	0.00	0.00	32.3	14.7	2.94	2.94	5.88
												5	1			

A-6、A-7(第一選択)選択パターン																
(c)	(c)	(c)	(c)	(c)	(d)	(d)	(d)	(d)	(d)	(d)	(e)そ	(e)そ	(f)わ	(f)わ	(f)わ	(f)わ
家庭	家庭	家庭	家庭	家庭	言語	言語	言語	言語	言語	言語	他の	他の	から	から	から	から
環境	環境	環境	環境	環境	環境	環境	環境	環境	環境	環境	(j)サ	(h)	ない	ない	ない	ない
(d)	(e)	(h)	(i)教	(j)	(c)	(d)	(e)	(g)金	(h)	(j)サ	ーピ	医	(a)	(d)	(h)	(i)教
情	飲食	医	育	サー	運輸	情	飲食	融	医	ーピ	ス	療・	建	情	医	育
報・	業・	療・		ビス		報・	業・		療・	ス		福祉	設・	報・	療・	
通信	宿泊	福祉				通信	宿泊		福祉				不動	通信	福祉	
													産、			
0	0	3	0	2	1	1	0	0	1	0	0	0	0	0	0	1
0.00	0.00	8.82	0.00	5.88	2.94	2.94	0.00	0.00	2.94	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	2.94

	A-8					A-9				
	人間環境分野で学ぶ内容がこれから就職を考える上で役に立つと考えられますか。(a)役に立つと思う (b)どちらかと言えば役に立つと思う (c)どちらでもない(d)どちらかと言えば役に立たないと思う (e)役に立たない					人間環境分野で学ぶ内容に学問的興味を抱きますか。 (a)興味を抱く (b)どちらかと言えば興味を抱く (c)どちらでもない (d)どちらかと言えば興味を抱かない (e)興味を抱かない				
	(a)	(b)	(c)	(d)	(e)	(a)	(b)	(c)	(d)	(e)
選択数	4	11	11	1	0	3	20	2	2	0
%	14.81	40.74	40.74	3.70	0.00	11.11	74.07	7.41	7.41	0.00

A-8,A-9 パターン分析													
(A-8)人間環境分野で学ぶ内容がこれから就職を考える上で役に立つと考えられますか。													
(a)役に立つと思う (b)どちらかと言えば役に立つと思う (c)どちらでもない (d)どちらかと言えば役に立たないと思う (e)役に立たない													
(A-9)人間環境分野で学ぶ内容に学問的興味を抱きますか。													
(a)興味を抱く (b)どちらかと言えば興味を抱く (c)どちらでもない													
(d)どちらかと言えば興味を抱かない (e)興味を抱かない													
(a)(a)	(a)(b)	(a)(c)	(a)(d)	(b)(a)	(b)(b)	(b)(c)	(b)(d)	(c)(a)	(c)(b)	(c)(c)	(c)(d)	(d)(a)	(d)(b)
1	3	0	0	1	8	0	2	1	8	1	1	0	1
3.70	11.11	0.00	0.00	3.70	29.63	0.00	7.41	3.70	29.63	3.70	3.70	0.00	3.70

	A-10	
	環境情報ビジネス学科と人間環境マネジメント学科の間にある違い (学修内容やめざす目標のちがいを自分なりにイメージできますか。ど れか一つに○。	
	(a) はい	(b) いいえ
選択者数	6	21
%	22.22	77.78

	A-12										
	本学人間環境マネジメント学科の卒業生らしい就職先として考えられる分野を2つ挙げてくださ い。(第一選択)										
	建 設・不 動産	製 造	運 輸	情 報・通 信	飲 食 業・宿 泊	卸 売・小 売	金 融	医 療・福 祉	教 育	サー ビス	その 他
選択 数	2	0	0	0	0	2	0	12	8	2	0
%	7.69	0.00	0.00	0.00	0.00	7.69	0.00	46.15	30.77	7.69	0.00

	A-12										
	本学人間環境マネジメント学科の卒業生らしい就職先として考えられる分野を2つ挙げてくださ い。(第二選択)										
	建 設・不 動産	製 造	運 輸	情 報・通 信	飲 食 業・宿 泊	卸 売・小 売	金 融	医 療・福 祉	教 育	サー ビス	その 他
選択 数	2	0	0	4	2	1	1	5	6	5	0
%	7.69	0.00	0.00	15.38	7.69	3.85	3.85	19.23	23.08	19.23	0.00

	A-12 (第一・第二選択)										
	本学人間環境マネジメント学科の卒業生らしい就職先として考えられる分野を2つ挙げてくださ い。(第一・二選択)										
	建 設・不 動産	製 造	運 輸	情 報・通 信	飲 食 業・宿 泊	卸 売・小 売	金 融	医 療・福 祉	教 育	サー ビス	その 他
選択 数	4	0	0	4	2	3	1	17	14	7	0
%	7.69	0.00	0.00	7.69	3.85	5.77	1.92	32.69	26.92	13.46	0.00

A-13											
あなたの就職希望分野について2つ挙げてください。（第一希望）											
	建 設・不 動産	製造	運輸	情 報・通 信	飲食 業・宿 泊	卸 売・小 売	金融	医療・福 祉	教育	サー ビス	その他
選択 数	2	4	0	0	1	3	1	6	4	2	3
%	7.69	15.38	0.00	0.00	3.85	11.54	3.85	23.08	15.38	7.69	11.54

A-13											
あなたの就職希望分野について2つ挙げてください。（第二希望）											
	建 設・不 動産	製造	運輸	情 報・通 信	飲食 業・宿 泊	卸 売・小 売	金融	医療・福 祉	教育	サー ビス	その他
選択 数	1	0	1	4	2	3	1	5	4	4	1
	3.85	0.00	3.85	15.38	7.69	11.54	3.85	19.23	15.38	15.38	3.85

A-13											
あなたの就職希望分野について2つ挙げてください。（第一・二希望）											
	建 設・不 動産	製造	運輸	情 報・通 信	飲食 業・宿 泊	卸 売・小 売	金融	医療・福 祉	教育	サー ビス	その他
選択 数	3	4	1	4	3	6	2	11	8	6	4
	5.77	7.69	1.92	7.69	5.77	11.54	3.85	21.15	15.38	11.54	7.69

A-12(第1選択)A-13(第1選択)パターン分析														
A-12 本学人間環境マネジメント学科の卒業生らしい就職先として考えられる分野を2つ挙げてください。(第一選択) A-13 あなたの就職希望分野について2つ挙げてください。(第一希望)														
(a)建設・不動産	(a)建設・不動産	(a)建設・不動産	(a)建設・不動産	(b)製造(i)教育	(c)運輸(a)建設・不動産	(d)情報・通信(a)建設・不動産	(d)情報・通信(d)情報・通信	(d)情報・通信(e)飲食・宿泊	(d)情報・通信(h)医療・福祉	(d)情報・通信(i)教育	(d)情報・通信(j)サービス	(d)情報・通信(k)その他	(e)飲食・宿泊	(f)卸売・小売(f)卸売・小売
1	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
3.85	3.85	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00

A-12(第1選択)A-13(第1選択)パターン分析														
A-12 本学人間環境マネジメント学科の卒業生らしい就職先として考えられる分野を2つ挙げてください。(第一選択) A-13 あなたの就職希望分野について2つ挙げてください。(第一希望)														
(f)卸売・小売(i)教育	(f)卸売・小売(j)サービス	(g)金融(a)建設・不動産	(g)金融(g)金融	(h)医療・福祉(a)建設・不動産	(h)医療・福祉(b)製造	(h)医療・福祉(d)情報・通信	(h)医療・福祉(e)飲食・宿泊	(h)医療・福祉(f)卸売・小売	(h)医療・福祉(i)教育	(h)医療・福祉(j)サービス	(h)医療・福祉(h)医療・福祉	(h)医療・福祉(k)その他	(i)教育(b)製造	(i)教育(c)運輸
1	1	0	0	1	2	0	1	2	1	0	5	2	1	0
3.85	3.85	0.00	0.00	3.85	7.69	0.00	3.85	7.69	3.85	0.00	19.23	7.69	3.85	0.00

A-12(第1選択)A-13(第1選択)パターン分析													
A-12 本学人間環境マネジメント学科の卒業生らしい就職先として考えられる分野を2つ挙げてください。(第一選択) A-13 あなたの就職希望分野について2つ挙げてください。(第一希望)													
(i)教育(e)飲食・宿泊	(i)教育(f)卸売・小売	(i)教育(g)金融	(i)教育(h)医療・福祉	(i)教育(i)教育	(i)教育(j)サービス	(i)教育(k)その他	(j)サービス(b)製造	(j)サービス(e)飲食・宿泊	(j)サービス(g)金融	(j)サービス(h)医療・福祉	(j)サービス(i)教育	(j)サービス(j)サービス	(j)サービス(k)その他
0	1	1	1	2	0	0	0	0	0	0	0	1	1
0.00	3.85	3.85	3.85	7.69	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	3.85	3.85

1.2 考察：2006年度分析結果を踏まえて

1.2.1. 人間環境に対する認識

質問 A-1（「環境」という言葉を聞いてあなたがイメージすることは何ですか）については、前回調査において初回から継続して回答してきた学生の選択にばらつきが見られたが、今回調査では自然環境を挙げる学生の割合が非常に高くなった。前回の調査結果について「環境に対する多様な認識」の浸透と分析したことを、今回の調査結果は否定するものと捉えられなくもない。しかし、今回調査の質問 A-2（人間環境の例として思い浮かぶものを2つ以上挙げてください。）を見ると、人間環境の例について、対人関係を中心とする「心理的環境」を選択する割合が増加し、「物理的環境」を挙げる割合が減少していることに注目したい。これは「物理的環境」と「人間（心理）的環境」の弁別化が進んだ結果と捉えることができる。A1において何ら修飾語を伴わない「環境」という言葉に対して学生がどのように反応するかは別として、環境に対する多様な認識そのものはこの3年を通して一定の深化を見たと言っていだろう。

1.2.2. 人間環境の全体像

前回調査において専門課程への移行が人間環境に対する学生の認識の多様化をもたらしたと分析したが、今回調査を見ても基本的にその認識に変わりはない。質問 A-4（人間環境について学んでいる、あるいは学んだという実感がありますか。）において肯定的回答が大半を占め、質問 A-5（本学での講義を受講してあなたの人間環境に対するイメージが変わりましたか。）において人間環境に対するイメージが変わったという割合が高くなっていることもその認識と符合している。

しかしここで注意しなければならないのは、質問 A-3（人間環境分野に分類される学問を2つ以上挙げてください。）において2つ以上の回答が求められているにも関わらず、総回答数（21）が回答者数（27名）の2倍はおろか、回答者数そのものにも達していないことである。（A-2においても回答数は回答者数の2倍に満たない。）さらに、質問 A-10（環境情報ビジネス学科と人間環境マネジメント学科の間にある違い（学修内容やめざす目標のちがいを）を自分なりにイメージできますか。）において否定的回答が大半を占めたことも見逃せない。質問 A-3については選択肢の設定にも問題があったのかもしれないが、（自分なりの）人間環境の全体像が出

来上がっていないと見ることもできるだろう。つまり、自分が専攻している「これまでは人間環境学とは思われなかった学問」が実は人間環境学の一部であると認識はできても、「人間環境に他にどのようなものがあるのか。」や「どこからどこまでが人間環境なのか」といった問いに答えられないのである。

これは前回報告において、「環境に対する多様な認識」が一定の発展をみせたものの「人間環境に対する一体化された認識」が醸成されなかった」と分析した傾向が未だに続いていることを示している。前回報告では、「人間環境」という言葉に括弧所がないだけに、「個々の人間環境系学科において学問上のアイデンティティ（学問体系）があるのかなのか、あるならばそれはどのようなものなのか、ないならばそれはなぜなのか（学際的に学ぶことの意義・本質、等）を学生（あるいは高校生）に対して明らかにする必要がある」と指摘した。今回の結果を見ても、人間環境に対する一体化された認識は無論のこと、学際的に学ぶことの意義も学生には伝わっていないと思われる。しかし、それに対する処方箋を見つける前に、「人間環境」とは何なのか、「学際」とは何なのかについて、教える側が意見の一致を見ていたのか問い直すことが必要だ（だった）と思われる。これについては節を改めて考察する。

1.2.3. 自分なりの人間環境像の獲得：学際的に学ぶとは

人間環境に対するイメージが確立できていない学生が多い事について、前回報告では、「単に人間環境のイメージを「教えられていない」ことが問題なのではなく、括弧所のない人間環境という概念に対して自分なりのイメージを形成できない、あるいはそうしようとする意思すら感じられないことが問われるべきである。」と述べたが、今回は、「人間環境のイメージを教えられていない」ことの意味・問題について考察してみたい。

近年多くの大学で見られるようになった、「人間（環境）系」学部（学科）だが、「人間環境」が学部名と学科名に使われるケースに分かれるようである。どちらが相応しいのかはともかく、「人間環境」という枠の中にさらに具体的な（体系を有した）学問名（あるいは研究対象）を冠したコースを設けているケースが多い。というのも、人間環境の枠の中に収められている学問分野は実に多様であり、「人間環境」という言葉

だけでは学部の実態を把握できないからである。つまり、人間環境のイメージを少なくとも具体的かつ画一的に「教える」ことは少なくとも困難なのであり、従って、前回報告で述べたように、「自律的かつ論理的思考により自分なりの見識（本節の場合人間環境に対する見識）を持つ姿勢が少なくとも人文系の人間環境研究において決定的に重要」なのである。

では、人間環境に対する自分なりの見識を持つためにはどうすればよいのか、どうすれば上記「自律的かつ論理的思考」が働くのか。筆者はこのために、まずは自分の専門性を磨くことが大事であると考え。その論理は「異文化理解」と平行である。他者あるいはコミュニティへの理解・許容は自分自身への深い理解と、(排他的ではない)自我の確立無しにはあり得ない。そして他者への理解や許容は、自分なりに確立されたものの見方、考え方を通して行われぬ限り、決して自律的なものとはならない。

ある専門性を極めた者が、その物差しで異なる学問体系を見た時に、その学問体系の「もう一つの本質」が見えるのである。バックグラウンドのない者に複数の学問体系を知識として画一的に伝授しても、それらが有機的かつ生産的作用を引き起こすことは難しい。

つまるところ、「人間環境のイメージを教えられていない」とは、(仮に教えられればだが)それを知識として授けることが無意味であることを意味しているのだが、問題を「人間環境のイメージが形成できていない」に置き換えると、それは「専門性が培われていない」ことをまず示唆するのである。

それでは、専門性が培われていれば自動的に「自律的かつ論理的思考」が働くのかというと、話はそう簡単ではない。ここで問題になるのがキーワード(考えるヒント)である。

いわゆる「総合系」、「統合系」、「学際系」と呼ばれる学科が単なる寄せ集めの集団とみなされ、学生や社会の支持を失うケースがある。人間環境も他ならぬ総合系だが、その名の通りの「総合(科学)学部」と「人間環境学部」の違いはどこにあるのか。月並みだが、それは人間環境学部が「人間の本質」を追究することに立脚していることにある。教員、学生に関係なくこの視点に立って、お互いの立場からお互いを見直し、接点を求めていくのが本筋であろう。この視点が失われた時、人間環境学部(学科)は寄せ集め集団と化してしまう。寄せ集めでも各パーツが高い専門性を発揮すれば、一定の支持を得、事業としての生存も保証されるのであろうが、

それがなければ「広く浅い」知識を植えつけるだけのカルチャースクールと化してしまう。そこに大学としての将来展望はない。

ところが、上記本筋を維持していくほどに、成熟しきれていない大学が(少なくとも日本には)多いのではないだろうか。一つの問題は学生の「考える力」であり、もう一つは良質のアカデミズムを追究する大学の風土である。日本でも、一部には、高い基礎学力とそれに相応した思考力を有する学生を擁し、新しい学問の体系を開拓している学部(学科)もあると聞くが、基礎学力と相応の思考力不足を補うことなく、いたずらに知識の実利と職業能力を標榜し、社会に認められる真のインテリジェンスを育てる姿勢のないところに、学際の花開く余地は見出しにくい。総合系学部の猫の目のような名称変更や組織改変を見るにつけ、時として、学際の本質を見失った迷走を見る思いが筆者にはある。

1.2.4. 人間環境からの職業観

職業や就職に関する学生の意識を問うアンケートの調査結果においては、およそ、前回調査時から大きな変化は見られなかったが、注目すべき点を2点指摘したい。

1つは、質問A-12(本学人間環境マネジメント学科の卒業生らしい就職先として考えられる分野を2つ挙げてください。)に比べ質問A-13(あなたの就職希望分野について2つ挙げてください。)では選択のばらつきがより大きくなっていることである。この理由として、一つには、今回の調査が就職活動を目前に控えた時期に行われたことが挙げられよう。医療・福祉・教育への関心が高いとはいえ、本学で現実に医療(心理)・福祉・教育を専攻している学生は少ない。専攻と就職を結びつける傾向については前回報告でも指摘したが、この傾向が就職活動を控えていよいよ強まっているという見方である。しかし、学生と話してみると、もう1つの重要な理由があるようである。就職セミナー等を通じて、医療・福祉等の業界の現実を耳にした多くの学生が同業界を敬遠しているのである。もちろん、医療(心理)・福祉を学んでもそれが必ずしも医療・福祉の現場で生かされなければならない理由はないし、学生の志の問題もあるだろう。しかし、就職活動目前まで志していたものが急に変わることが多いとすれば好ましいことではない。もっと早い段階から職業選択についてきめ細かい指導を行い、各職種に対する適確な情報を伝

える必要があるだろう。また、そもそも本学科に医療・福祉系の講座が多くないこと、そして、元々医療・福祉系以外を希望する学生も（少なくともかつては）一定数いたことを踏まえ、本学科の真の多様性、そしてその意味を伝える必要があったのではないか。

もう一つの注目すべき点に、質問 A-8 (人間環境分野で学ぶ内容がこれから就職を考える上で役に立つと考えられますか。)と質問 A-9 (人間環境分野で学ぶ内容がこれから就職を考える上で役に立つと考えられますか。)において(肯定的であるにせよ、否定的であるにせよ)積極的な回答が少ないことがある。否定的回答こそ少ないものの、積極的回答も大半は「どちらかといえば」である。これは、多かれ少なかれ、日本の大学に見られるであろう現象であるが、新領域を開拓しようとする学科としては刺激不足の感も否めない。しかし、そこに見え隠れするのは、むしろ、安易に単位はもらったが、入学時に有していた興味の掘り下げ、あるいは職業選択や人生全般における位置づけ、ができていない姿である。教員個々の努力が必要であるとは言わずもがなだが、相応の苦難を強いても確たるものを学生に植え付けるようなシステム(カリキュラム、単位認定方法、等)が必要であるように思われる。

1.3. 「人間環境」アンケートを通じて

本節においては、2006年度後期に本学Ⅰ期生に対して行われた人間環境についてのアンケート調査の結果(アンケート用紙回収率が低く提示を回避した2007年度前期の調査結果と主な傾向において差異はなかった。)を提示し、前回調査までの結果と比較しながら分析を行った。人間環境に対する認識の多様化は全体としては認められるものの、個々の意識の中に人間環境に対する多様な見方が備わってきているのかという点では、必ずしも答えは肯定的でない。さらに、学科からイメージされる職種と本人の希望職種の間には一定のズレが見られ、また、学問の有用性や興味からみた刺激(この場合の刺激とは、単なる表面的なおもしろさや資格云々ではなく、指導等の徹底等によって発生する学問への深い理解を指す。)の少なさを示唆すると思われる調査結果も観察された。それを踏まえ、これまでの人間環境に関するアンケート調査の総括として、「人間環境系学科」全般に内在する問題やあるべき学科像について示唆を行った。

但し、上記は本学科開設以来のスタッフの努力を一片たりとも否定するものでないことを、最後にお断りしておく。本研究の目的の一つは、真に、「本学学生の意識調査を通じて、本学に限らず、人間環境という比較的新しい学際的領域のあるべき姿を模索する³⁾」ことであった。図らずも今回までの縦断的調査から見えてきたものは、学生の有様もさることながら、上記「あるべき姿」を限られたストラテジーの中から模索してきた教員側の努力の跡である。

1 節注

- (1) 1節の執筆は中川が担当した。
- (2) 石崎保明・坂本 剛・高橋陽子・内藤 徹・中川直志 (2007) 「人間環境系学生の適応過程に関する縦断的研究(その3)」、『環境経営研究所年報第6号』, 19-45, 名古屋産業大学環境経営研究所
- (3) 内藤 徹・中川直志・石崎保明・坂本 剛・高橋陽子 (2005) 「人間環境系学生の適応過程に関する縦断的研究」, 『名古屋産業大学論集第7号』, 67-77, 名古屋産業大学環境情報ビジネス学会

2. 環境心理領域に関する調査¹⁾

2.1. 考察の目的と対象

本節の目的は、2004年度に人間環境マネジメント学科に入学した学生(以下、Ⅰ期生)を対象に、2006年後期と2007年前期に実施した2回のアンケート調査(それぞれ、Ⅰ(06)後、Ⅰ(07)前と表記する)の結果を基に、これらの時期における環境心理領域(以下、「領域」)に対する学生の意識の変化を探ることである。特に今回の調査は、3年次より受講可能となる専門ゼミナールおよび専門教育科目が開始して半年から1年後となる期間を対象としており、専門ゼミナールにおいて「心理」、「家庭環境」、「言語環境」の各分野に所属する学生(以下、「領域」所属学生)の志向性を捉えることが主要なテーマとなる。今回の調査対象期間は、また、多くのⅠ期生にとって、卒業後の進路を思案する時期でもある。よって、後で論じられるように、「領域」に対する就職観については顕著な意識の変化が観察された。

なお、今回の考察は上記期間内に実施された2回の調査に主眼が置かれるものの、本研究は今回の報告をもって終了するということもあり、断りのない限り、これまで内藤ら(2005)、

中川ら(2006)、石崎ら(2007)において示された 2004 年後期、2005 年前期・後期、2006 年前期に同じ I 期生に対して行われた 4 回の調査結果(それぞれ、I (04)後、I (05)前、I (05)後、I (06)前と表記する)も併せて提示する。本研究の総括に

ついては 2.6 節で論じる。

まず、今回の 2 回の調査を含め、過去のアンケート調査における回答者数の推移を見てみよう。^②

	I (04)後	I (05)前	I (05)後	I (06)前	I (06)後	I (07)前
回答者数	51 名	25 名	36 名	30 名	27 名	18 名
「領域」所属学生の回答数	-	-	-	14 名 (46.67%)	11 名 (40.74%)	12 名 (66.67%)

表 2-1-1:各アンケート調査の回答者数

表 2-1-1 にあるように、今回の調査の回答者は I (06)後と I (07)前でそれぞれ、27 名、18 名であり、本学科の所属学生数からすると回収率が高いとは決していえないが、「領域」所属学生に限ってみると、I (06)後は 11 名、I (07)前は 12 名から協力を得ており、「領域」所属学生の回収状況は比較的良好であるといえる。

2.2. 学科内での「領域」に対する関心度の推移

本節では「領域」に対する I 期生の学問的関心の推移をみる。設問 B-1 は、各々の調査時において大学で学びたいと考えている学問分野を母ねたものである。この設問では、複数回答を認めており、回答数は以下のとおりである。

	I (04)後	I (05)前	I (05)後	I (06)前	I (06)後	I (07)前
回答数	108	52	71	69	65	36

表 2-2-1: B-1 の回答者数の推移

回答の中で本学で学ぶことができる「領域」の内容と明確な関連が認められる学問名、分野、およびキーワードは(1)に示される。

(1) 心理(学)(がつくものを含む)、福祉(がつくものを含む)、

言語(学)(英語、中国語を含む)、人間関係、カウンセリング、臨床、医療、(恋愛)、人格

(1)に含まれる用語と、それ以外の用語との回答状況の相違は、比率として表 2-2-2 に表される。

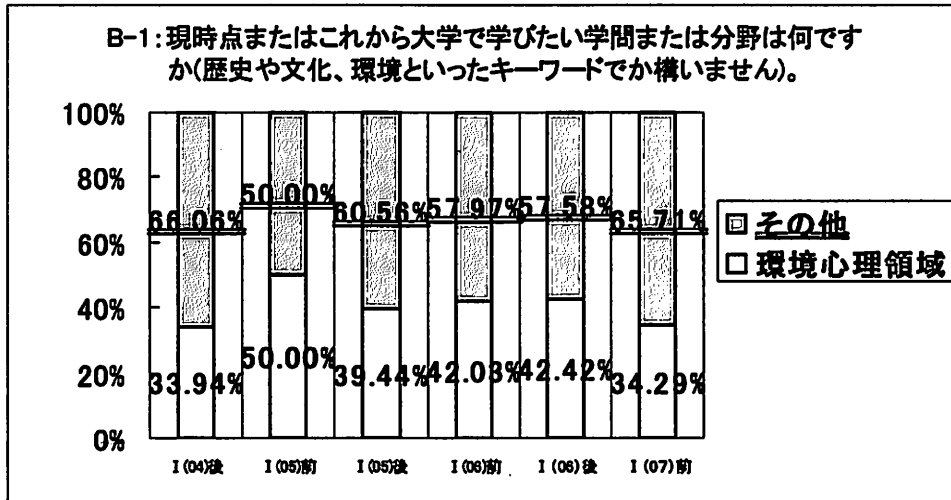


表 2-2-2 : 本学科所属学生における「領域」への関心度の推移

I(06)後期の結果は、その直近であるI(06)前のそれと比べて現状維持、I(07)前では(1)を回答している回答数の割合が低下している。I期生全体では両者の比率はほぼ横ばいに推移しているが、「領域」所属学生に限ってみれば、I(06)後の11名、I(07)前の12名(うち1名は無回答のため除外)のうち、(1)以外の回答のみを答えた学生は、それぞれ2名と1名であ

った。このことから、特にI(07)前における推移は、もっぱら非「領域」所属学生の意識の現れとみることができ、「領域」所属学生においては「領域」に対する関心が持続している。この観察は、「領域」で学ぶ内容に対する学問的関心の有無を尋ねた設問B-7の結果とも符合する。まず、本学科所属学生全体への調査結果を見てみよう。

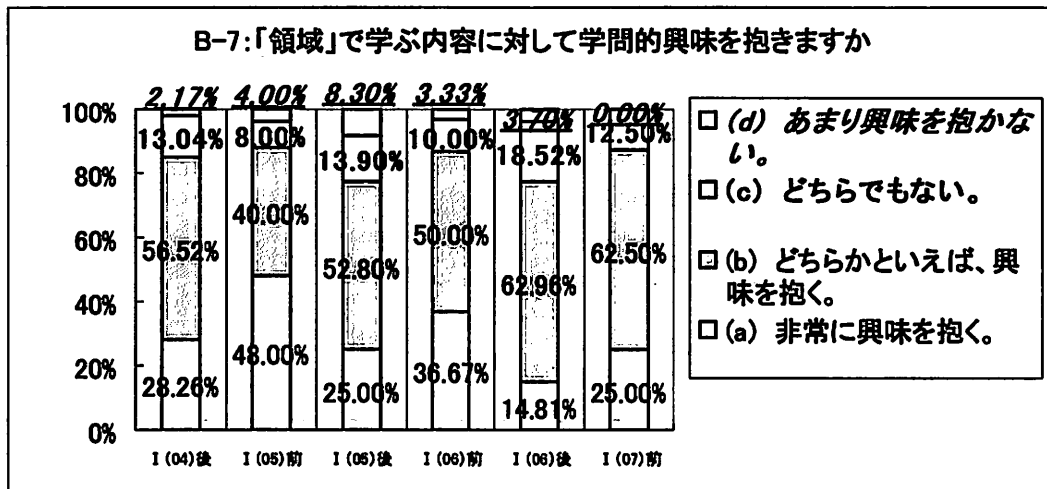


表 2-2-3 : 「領域」で学ぶ内容に対する学問的関心の推移

I期生全体の結果である表 2-2-3 からは傾向性を指摘することは困難であるが、「領域」所属学生に限ってみると、表 2-2-4

が示すように、いずれの調査回においても(a)(b)の合計が80%を超えている。

	(a)非常に興味を抱く	(b)どちらかといえば興味を抱く	(c)どちらでもない	(d)あまり興味を抱かない	(e)全く興味を抱かない
I (06)前	7 (53.85%)	4 (30.77%)	1 (7.69%)	1 (7.69%)	0 (0.00%)
I (06)後	0 (0.00%)	9 (81.82%)	1 (9.10%)	1 (9.10%)	0 (0.00%)
I (07)前	4 (36.36%)	5 (45.45%)	2 (18.18%)	0 (0.00%)	0 (0.00%)

表 2-2-4 : 「領域」で学ぶ内容に対する学問的関心の推移（「領域」学生の回答の分布）

以上の結果から、「領域」所属学生は「領域」に対して関心を抱いており、おおむね学びたい学問分野を専門領域として適切に選択できているといえる。

一方、表 2-2-4 においてひとつ気になることは、I (06)後において、(a)と答えた「領域」所属学生が一人もいないという事実である。今回調査対象となっている時期は、学生の各々が自ら希望して選択した専門ゼミナールに所属して半年が過ぎ、高い専門性が求められる各々の所属分野で卒業論文のテーマを選定もしくは決定しなければならない時期である。そのような重要な時期であるだけに、「領域」に対して抱く悩みが興味を上回ったという指摘ができるかもしれない。しかしながら、教員側からすれば、卒業論文作成に向けて「領域」

の魅力を超すところなく学生に教授すべきこの時期に、「領域」所属学生がそれを十分に感じ取ることができていないという事実については真剣に受け止める必要がある。「領域」所属教員にとって、ゼミナール所属学生に対するこの時期の授業改善は今後に向けての大きな検討課題となる。

2.3. 「環境心理」に対するイメージ形成

次に、学科所属学生の「環境心理」に対するイメージ形成の推移をみる。設問 B-2 は環境心理として思い浮かぶものを 2 つ挙げてもらうという問いで、その回答が、(1)に示される本学が掲げる内容とどの程度対応しているのかを表したものが表 2-3-1 である。

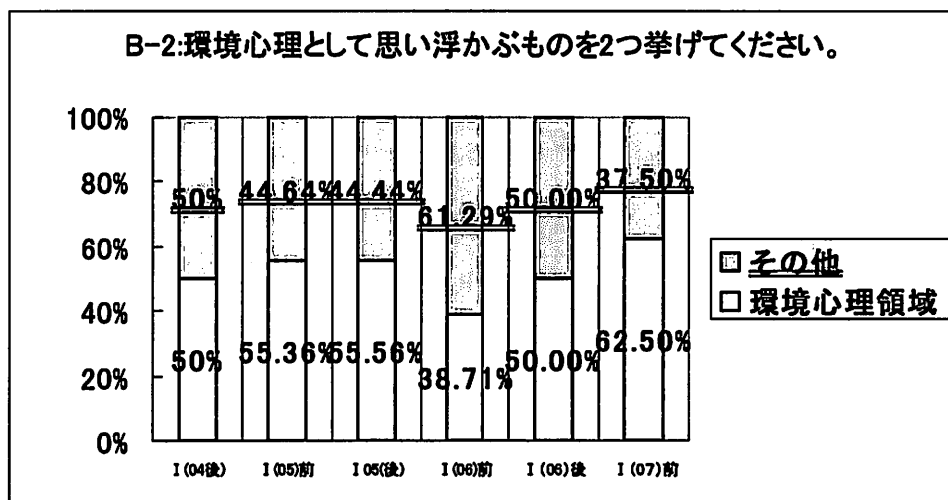


表 2-3-1 : 「環境心理」に対するイメージ形成の推移

表 2-3-1 から、I (06)前期でその割合が大幅に下がるものの、それ以降、本学科が掲げるイメージとの合致が徐々にではあるが着実に浸透していく傾向が観察される。⁽⁹⁾ 「領域」所属

学生に限定すると、表 2-3-2 に示されるように、イメージ形成の度合いはさらに顕著なものとなる。

	回答数	(1)(環境心理領域)を選択	(1)以外(その他)を選択
I(06)前	36	22 (61.11%)	14 (38.89%)
I(06)後	23	16 (69.57%)	7 (30.43%)
I(07)前	23	19 (82.61%)	4 (17.39%)

表 2-3-2 : 「領域」所属学生の設問 B-2 に対する回答傾向

このように、「領域」所属学生については、本学科が掲げる 次環境心理に分類される学問名を尋ねた設問 B-3 の結果 (1)の内容に沿った形で着実にイメージが形成されていることを見てみよう。とがわかる。

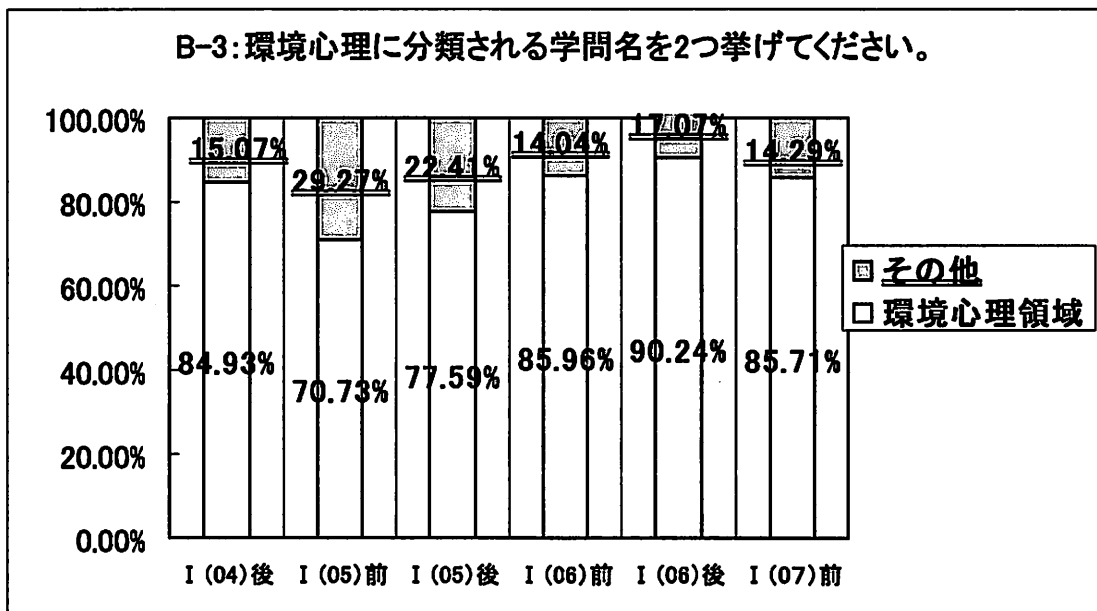


表 2-3-3 : 「環境心理」と学問名との対応

表 2-3-3 では、I(06)後の調査と比べて、I(07)前で「領域」以外の学問名を回答する学生の割合が高まっているが、これも「領域」所属学生に限ってみると、I(07)前で「領域」所属学生から得られた回答 20 のうち 19 が「領域」に配置されている学問名を答えている。(なお、1名の学生のみ「環境学」と答えている)。このことから、特に「領域」所属学生については、「領域」が意図するイメージや学問体系についての理解が得られていると考えられる。

2.4. 「領域」内での関心の推移

これまで、本学科所属学生の「領域」に対する意識を、特に「領域」所属学生の「領域」に対する意識の変化に焦点を当てながら考察してきた。ここでは、「領域」内の3分野(「心理」、「家庭環境」、「言語」)の中での関心の推移を見る。その結果は表 2-4-1 に示されている。

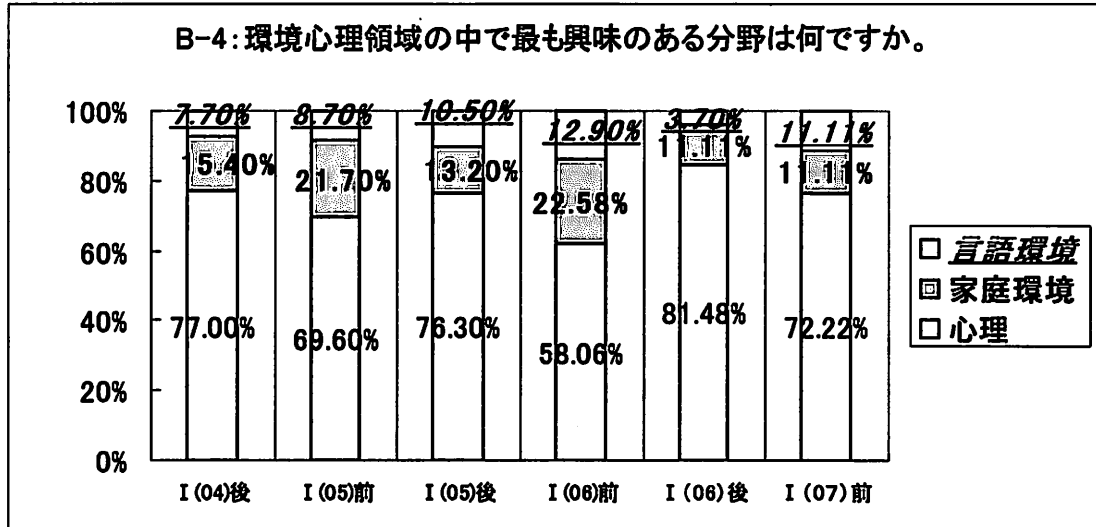


表 2-4-1: 「領域」内3分野の関心の分布

I(07)前において「家庭環境」と「言語環境」が同じ比率となったことを除けば、本調査を通じて、「心理」、「家庭環境」「言語環境」の順で関心が高いという傾向は変わらない。ま

た、これら3分野の有機的な結びつきの有無を尋ねたところ、表 2-4-2 の結果となった。

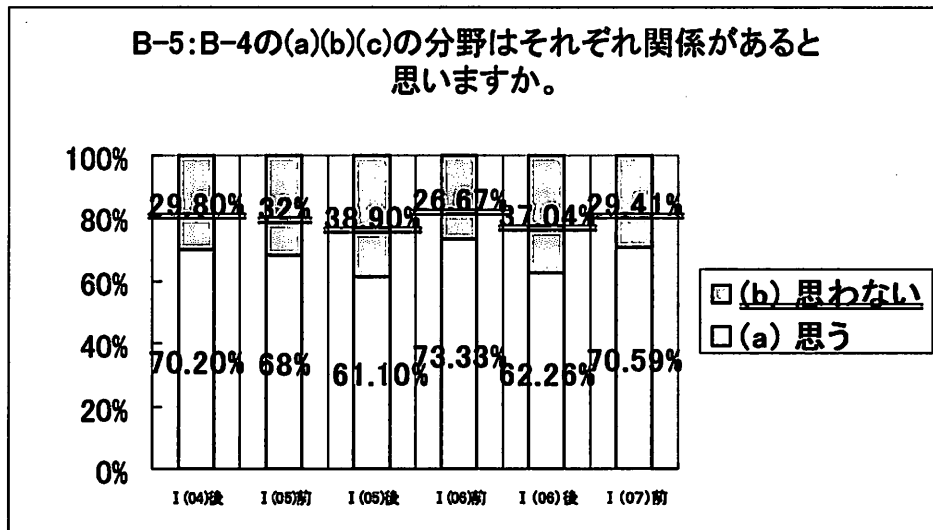


表 2-4-2: 「領域」内3分野の関連性

設問 B-5 を「領域」所属学生に限ってみると、表 2-4-3 の結果となった。

	回答数	(a)を選択	(b)を選択
I(06)前	14	12 (85.71%)	2 (14.29%)
I(06)後	11	8 (72.73%)	3 (27.27%)
I(07)前	11	8 (72.73%)	3 (27.27%)

表 2-4-3: 「領域」所属学生の設問 B-5 に対する回答傾向

I (06)後と I (07)前では、領域内3分野関連性を否定している学生が3名存在する。そのうち1名は両方の調査にわたって3分野の関連性を認めていないが他の2名はそれぞれ別の学生である。この結果は、3分野の関連性を認めていない「領域」所属学生が潜在的に多く存在する可能性があることを示唆している。

設問 B-5 と関連して、「領域」3分野がどのような結びつき方をしているのかに対して、自由記述を求めている。得られた回答のうちで、「領域」所属学生の I (06)後、I(07)の回答を、それぞれ(2)と(3)に挙げる。

(2) I (06)後における「領域」内3分野の関連性に対する自由回答

- ・人の心理は家庭環境によって変わるし、その影響で人の言語にも影響する(類似回答他1名)。
- ・家庭環境と心理は、家庭環境の良し悪しが成長していく上で心理的に大きく関係していると思う。
- ・心理状態：そのときの行動が違ってくる。家庭環境によって行動が違ってくる(家庭が安定していればその人も安定しているが、安定していないと家庭内暴力があるなど)。言語環境：言葉によってその人の行動が変わってくる。
- ・家庭環境から心理と言語が生まれる。
- ・すべて人間が関わっている。人間ありきで成り立つもの。
- ・言葉の上では分けられているが、これらはすべて人が生きていく人生の上に常にあるものであり、全く無関係なことはあり得ない。3つの関連性を具体的に述べようとしてもきりがないので・・・。

(3) I (07)前における「領域」内3分野の関連性に対する自由回答

- ・家庭環境が基盤となり、言語や心理が発達する。
- ・心理は家庭によってさまざまな感情が生まれる。言語も心によって変わるし、多くのことを語れるから。
- ・人と関わっている。
- ・心理と家庭環境と言語はわれわれにとって必要なものとい

う点で関連性がある。

- ・家庭環境において、心理と言語はコミュニケーションの手段として利用されているので関連がある。
- ・すべては環境で解釈できる。

サンプル数が決して多くないため即断はできないものの、今回得られた結果では、「家庭環境を基盤として、それが心理や言語に影響を与える」という見解が支配的であるように思われる。これは、「領域」所属学生は各々の分野の学問的内容を踏まえた上で、「心理」と「言語」の発達過程における「家庭」の重要性を認めつつあると解釈することができるかもしれない。いずれにせよ、今回の回答状況は、「環境」や「心理」といったキーワードのみから印象的に各々の関係を結び付けようとする回答が多かった第1回目の調査結果(内藤ら(2005:72)参照)とは質的に異なるものであるといえる。

なお、I (04)後の調査(内藤ら(2005:72)参照)では、「心理」・「家庭環境」と「言語環境」との結びつきが希薄であったが、(2)と(3)の結果を見る限り、「言語環境」にある程度の関連性を認めている回答がほとんどである点も興味深い。

2.5. 「領域」に対する就職観

2.5.1. 総論

2.1 節でも述べたとおり、大学3年次後期から4年次前期は就職活動が本格化する時期である。就職に対する意識については、この時期に最も高くなることが予測される。では、本学科所属学生は学問としての「領域」と就職との間にどのような関係を見出しているのだろうか。まずは本学科所属学生全体の「領域」と結びつく就職のイメージを見てみよう。設問 B-8(本学のカリキュラムに関係なく、一般論として、「環境心理領域」という学問領域を学んだ学生にとってふさわしいと思われる就職先)の結果は表 2-5-1 に示される。

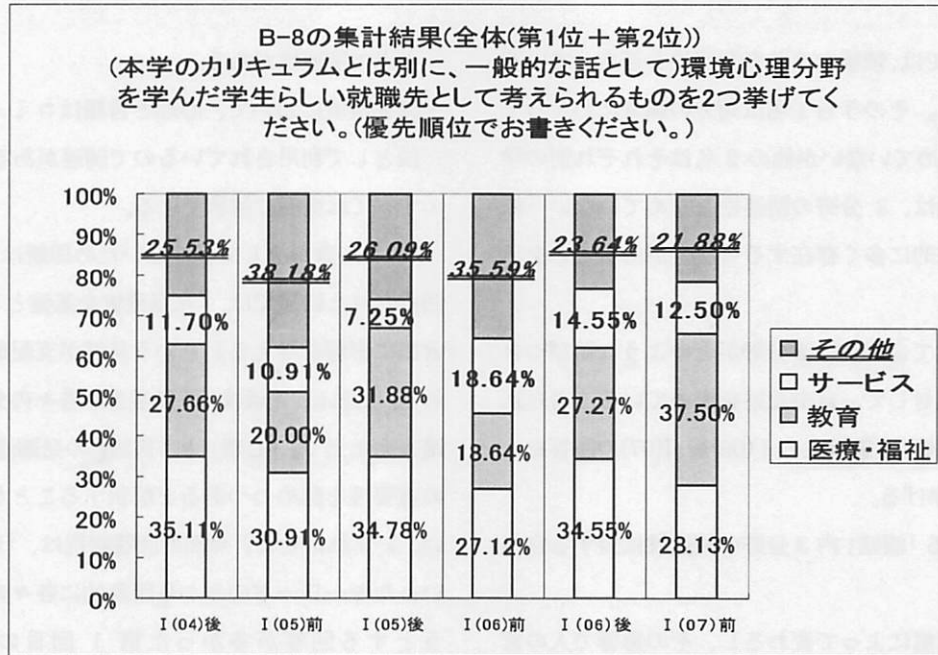


表 2-5-1 : (一般論としての)「環境心理分野」を学んだ学生にとって
 ふさわしい就職先(上位3位の推移)

次の表 2-5-2 は、設問 B-8 とは異なり、設問 B-10(本学の「環境心理領域」を学んだ学生にとってふさわしいと思われ

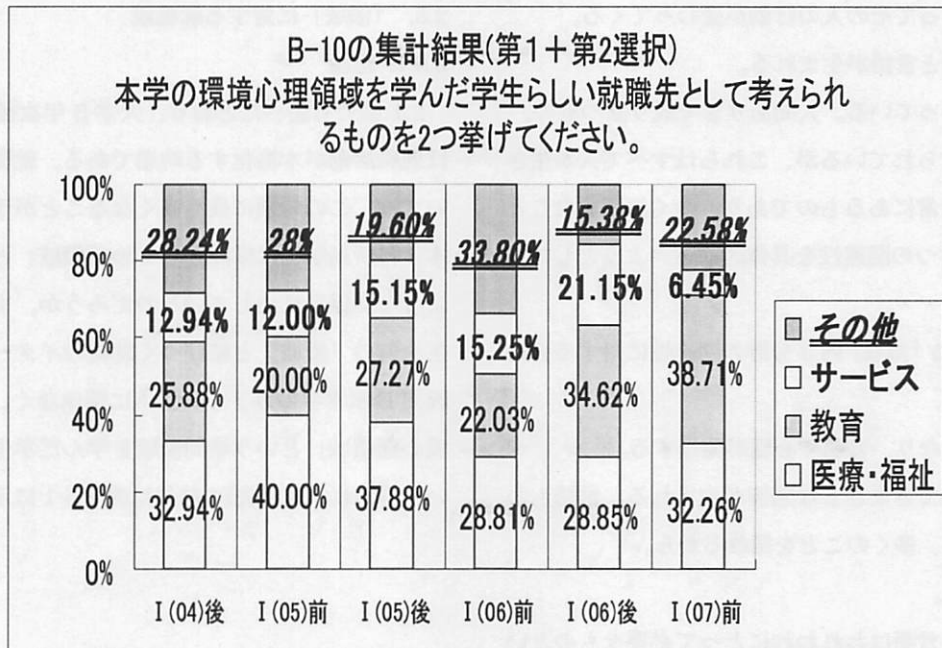


表 2-5-2 : 本学の「領域」を学んだ学生としてふさわしい就職先
 (上位3位の推移)

設問 B-8 と B-10 は上位2位までを選んでもらい、その優先順位も併せて求めている。設問 B-8 と設問 B-10 の第1位の分布は、それぞれ、表 2-5-3 と表 2-5-4 に示されている。

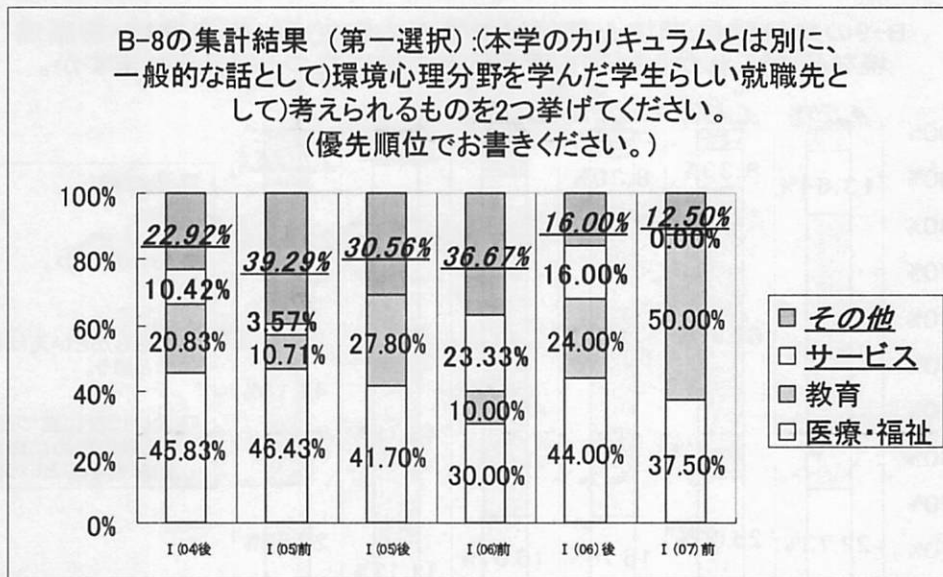


表 2-5-3 : (一般論としての)「環境心理分野」を学んだ学生にとってふさわしい就職先 (第一選択、上位3位の推移)

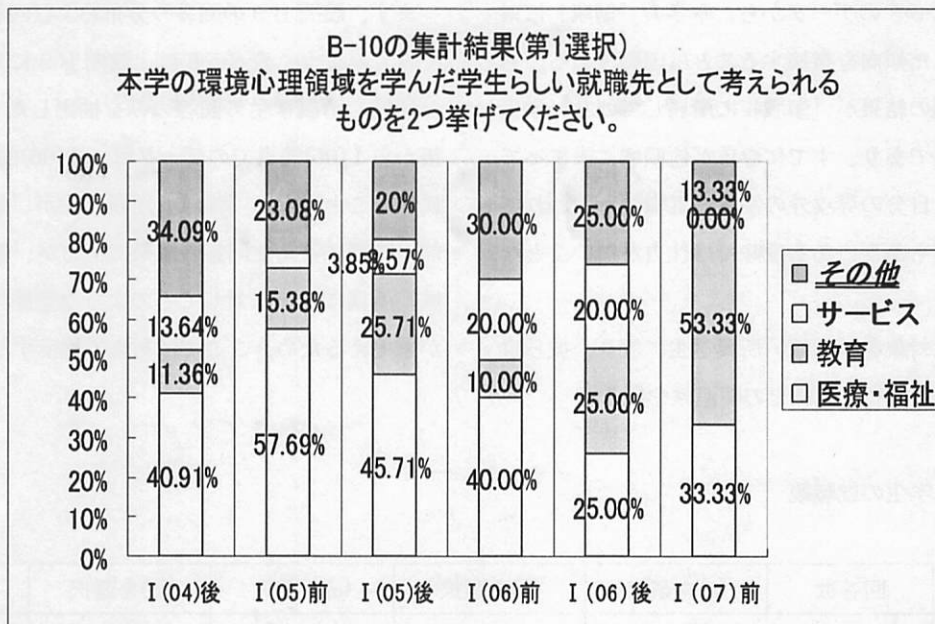


表 2-5-4 : 本学の「領域」を学んだ学生としてふさわしい就職先 (第一選択、上位3位の推移)

設問 B-9 は「領域」で学ぶ内容がこれから就職を考える上で役に立つと考えられるかを尋ねたものである。結果は表 2-5-5 に示される。

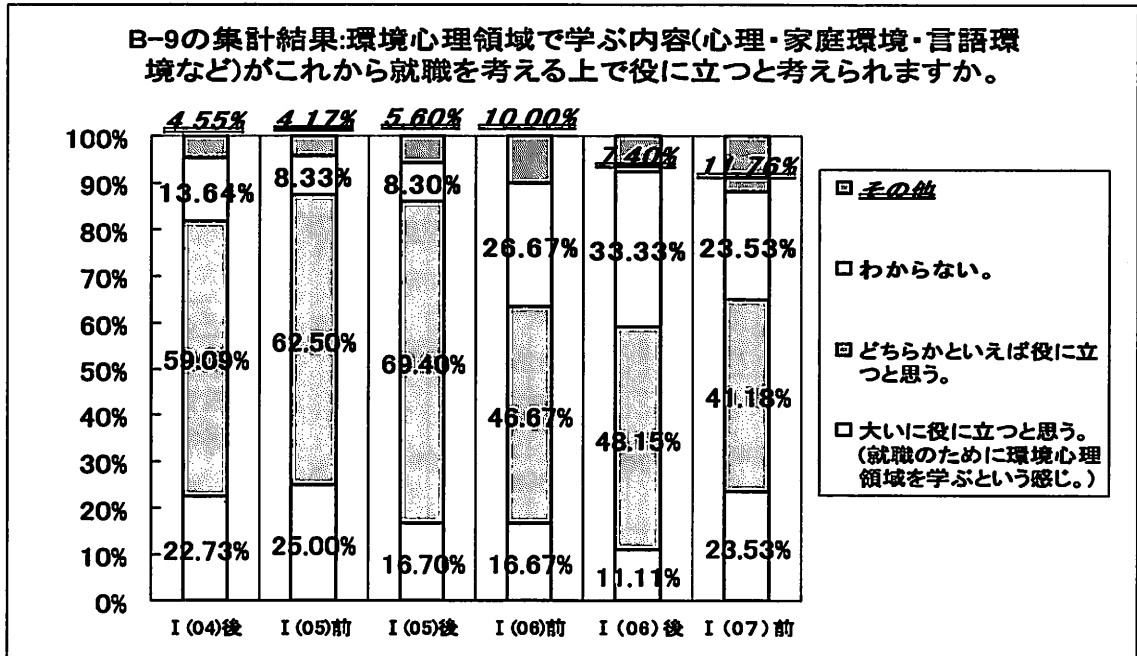


表 2-5-5 : 学問的内容と就職との相関(全体)

表 2-5-1 から表 2-5-5 のデータから、本学の「領域」に対する就職観の一貫した傾向を指摘することは困難である。もっとも、これは上記の結果が「領域」に所属していない学生を含めた上での結果であり、すでに専攻が他領域に決まっている学生に対して、自分の専攻外の領域の就職観を問われても答えようがない面もあり、ある意味では仕方がないことなのかも知れない。

そこで、次節では対象を「領域」所属学生に絞り、彼ら自身が専攻している「領域」と就職との関連性を探る。

まず、設問 B-9 の回答の分布および回答傾向の推移についてみてみよう。表 2-5-6 は、設問 B-9 に対する回答のうち、「領域」所属学生の回答のみを抽出したものである。I(04)後から I(05)後までのデータは、I(06)前以降、「領域」に所属することになる「領域」所属学生が「領域」に配属される前の時期に答えた回答の結果であるが、「領域」配属学生が「領域」所属に就職に対してどのような意識の変化が見られたのかを捉えるため、ここではあえて提示する。

2.5.2. 「領域」所属学生の就職観

	回答数	(a)を選択	(b)を選択	(c)を選択	(d)を選択	(e)を選択
I(04)後	14	3 (21.43%)	8 (57.14%)	1 (7.14%)	1(7.14%)	1 (7.14%)
I(05)前	10	2 (20.00%)	7 (70.00%)	0 (0.00%)	0 (0.00%)	1 (10.00%)
I(05)後	12	0 (0.00%)	10(83.33%)	2 (16.67%)	0 (0.00%)	0 (0.00%)
I(06)前	14	0 (0.00%)	9 (64.29%)	3 (21.43%)	2 (14.29%)	0 (0.00%)
I(06)後	11	0 (0.00%)	6 (54.55%)	4 (36.36%)	1 (9.09%)	0 (0.00%)
I(07)前	11	1 (9.09%)	5 (45.45%)	3 (27.27%)	2 (18.18%)	0 (0.00%)

表 2-5-6 : 本学で学ぶ学問的内容と就職先との相関(「領域」所属学生)

表 2-5-6 から次の 2 点を指摘することができる。まず、内藤ら(2005:72)や中川ら(2006:21)で指摘したとおり、本学科所

属学生は、入学当初、本学で学ぶ学問的内容と就職先との間に比較的強い相関を見出している。「領域」所属学生に限ってみても入学当初はそのような傾向が観察されるものの、「領域」所属学生は、調査を通して、実際には両者にそれほど強い相関を見出してはいないという点である。

そして、このことよりもさらに重要なことは、「領域」所属学生が「領域」に配属される前よりもむしろ「領域」所属以降のほうが学問的内容と就職先との相関に対して否定的にシフトするという事実である。この意識の変化は、B-10(本学の

環境心理領域を学んだ学生らしい就職先)の回答傾向からも読み取ることができる。「領域」所属学生に対する設問 B-10の回答傾向の推移は表 2-5-7 に示される。

I (04)後 (12名)		選択者数(名)	「領域」内比率
医療・福祉		6	50.00
教育		2	16.67
サービス		3	25.00
それ以外		1	8.33
I (05)前 (9名)		選択者数(名)	「領域」内比率
医療・福祉		6	66.67
教育		2	22.22
サービス		0	0.00
それ以外		1	11.11
I (05)後 (12名)		選択者数(名)	「領域」内比率
医療・福祉		6	50.00
教育		3	25.00
サービス		2	16.67
それ以外		1	8.33
I (06)前 (14名)		選択者数(名)	「領域」内比率
医療・福祉		8	57.14
教育		0	0.00
サービス		4	28.57
それ以外		2	14.29
I (06)後 (10名)		選択者数(名)	「領域」内比率
医療・福祉		2	20.00
教育		4	40.00
サービス		3	30.00
それ以外		1	10.00
I (06)前 (10名)		選択者数(名)	「領域」内比率
医療・福祉		4	40.00
教育		3	30.00
サービス		1	10.00
それ以外		2	20.00

表 2-5-7 : 「領域」所属学生における B-10 (第 1 選択)の回答状況

調査を通じて「領域」所属学生は、本学の「領域」を学んだ学生らしい就職先として「医療・福祉」が相応しいと考える傾向が強いものの、今回の調査対象である I (06)後と I (07)前ではその選択率が下がっており、「教育」と拮抗している。このことから、「領域」所属学生は、「領域」の学問分野を学ぶにつれて、就職先としての「医療・福祉」という分野との間に特に相関を見出しにくくなっているといえる。

2.6. 総括

本節では、3 年次後期から 4 年次前期までの期間を対象に、

「領域」に対する意識の変化を考察した。本節での考察をまとめると、特に「領域」所属学生の意識の変化に関して、(4)に示される 3 点を指摘することができる。

- (4) a. 「領域」所属学生は、「領域」で学ぶ内容に対して持続的に関心を抱いており、おおむね自身が学びたい学問的内容を専門分野として選択できている。
- b. 「領域」所属学生は、本学が掲げる学問的内容に沿った形で「領域」に対するイメージ形成ができつつある。
- c. 「領域」所属学生は、入学当初は本学で学ぶ学問的

内容が就職に役に立つと考えていたが、「領域」の分野を専門的に学ぶにつれて、就職との相関を見出すことが困難になっている。

また、本研究を教育的な視点で捉えると、本研究の6回に及ぶ縦断的調査の結果は、次の2つの時期の重要性に対して示唆を与えている。

(5) a. 1年次における学問体系の教育

b. 3年次における授業改善と就職指導

内藤ら(2005:72)や中川ら(2006:21)で指摘したように、本学科に入学する学生の多くは、入学時において心理学を志し、漠然とはあるが、その学問内容の延長線上で「医療・福祉」や「教育」を就職先として思い描いている。しかしながら、「領域」に所属して研究を進めていくうちに、学問体系と「領域」が意図する学問体系についての理解は深まるものの、それと反比例する形で「医療・福祉」や「教育」との相関が見出せなくなってくるという事実がある。この「領域」所属学生が抱くイメージおよびその変化については、それ自体、特に善悪の価値判断を伴うものではないが、このイメージが崩れつつあるときに、「領域」担当教員として、新たな可能性を学生に提示できているのか、という問いについては否定的な見解を示さざるを得ない。例えば、表2-5-6にあるように、I(06)前以降、(c)および(d)を選択する「領域」所属学生が始めてきているという事実は、我々が学生の就職に対して新たな可能性を提示できているとは言い難いことを端的に示している。もっとも、大学で学問的内容は学生それぞれの知的好奇心に基づくものであり、それが必ずしも就職と直結する必要がないという主張もまた正論である。しかしながら、教育を提供する側として、「領域」で学ぶ内容が就職に対してどのような形で利用可能となるのかを具体的に提示することは、就職に対して学生に過度の不安を与えないという意味で、入学当初から恒常的になされるべきであろう。

また、教育面に対する配慮も、現状のままで十分であるとは必ずしも言い切れない。特に、表2-4-3にあるように、「領域」所属学生の約3割が「領域」内の3分野に関連性を見出していないという事実は注目に値する。I期生が入学時に手にした平成16年度名古屋産業大学『履修要覧』には、環境心理領域に関して以下の記述がある(冒頭の括弧は石崎による)。

(6) (「環境心理」領域には)環境が人間の心や行動に与える影響を客観的に捉え、人間の心のメカニズムを解きあ

かすような授業科目が配置されています。」(p.10)

(6)が示唆しているように、本「領域」設立の趣旨として、3つの分野は独立したものではなく、心のメカニズムの解明の名の下に有機的に結びついた学問体系を謳っている。しかしながら、(2)(3)で示される記述回答を見てもわかるように、記述内容はまだまだ抽象的な域を出ておらず、例えば授業で学んだ具体的な事例に基づく3分野の関連性を指摘した回答は、調査を通して皆無である。

来年度より導入される本学科の新カリキュラムでは、各領域で開講されている科目の中から一定限度以上の単位を取得しないと卒業できない仕組みに変更されている。これにより、学生は早期から自分が所属することになる領域に対する帰属意識を高めることが予想される。一方、教員の側からすれば、自分が所属する領域の学生に対して、これまで以上に体系的な学修を促すことが可能かつ必要となる。その意味で、(5a)の時期における領域の導入的科目の重要性は、これまで以上に増すことになる。本研究での成果を念頭に、本学科が歩んできたこの4年間に「領域」担当教員として何をしてきたのか、そして新たに何をしなければならないのかを改めて検討し、魅力ある「領域」の姿を具体的な形で提供し続けることが、本研究に労力を費やしてくれた学生への責務であると考えている。

最後に、本研究の「環境心理領域に関する調査」を分析するに当たって、資料作成に関して田口智之、齋木隆紀、浅井章秀の各氏に多大なる協力を得た。この場を借りて謝意を表したい。

脚注

(1) 2節の執筆は石崎が担当した。

(2) 「領域」所属学生とは、3年次以降に「領域」所属教員のゼミに配属されている学生を指す。カリキュラム上、I(04)後、I(05)前、およびI(05)後は「領域」所属学生が確定していないため、数字は示されていない。なお、以後のデータの中には、「領域」所属学生の数字が表2-1-1の数字と一致していないものがあるが、これは各々のアンケート項目において無回答のもの、または判読ができないなどといった不適正な回答のものを除外したことによる。

(3) I(06)前の結果に対する考察については、石崎ら

(2006:30)を参照のこと。

参考文献

内藤徹・中川直志・石崎保明・坂本剛・高橋陽子 (2005) 「人間環境系学生の適応過程に関する縦断的研究」『名古屋産業大学論集』 pp.67-78

中川直志・石崎保明・坂本剛・高橋陽子・内藤徹 (2006) 「人間環境系学生の適応過程に関する縦断的研究（その2）」『環境経営研究所年報』第5号 pp.1-30.

石崎保明・坂本剛・高橋陽子・内藤徹・中川直志 (2007) 「人間環境系学生の適応過程に関する縦断的研究（その3）」(共著)『環境経営研究所年報』第6号 pp.19-45.

3. 大学生の適応に関する検討^①

3.1. 目的

本研究では、大学生の適応過程を検討する目的で、大学生生活に関する事柄、クリティカルシンキング志向性、社会的スキル、職業志向性、そして自尊感情について調査を行ってきた（内藤ら、2005）が、ここでは大学生生活に関する事柄のうちの「大学生生活満足度」「大学生生活重要度」「友人関係重要度」の3変数のみについての検討を行うこととし、その他変数に関する検討は紙面をあらためる。

これまでの中川ら(2006)と石崎ら (2007) での検討において、友人関係重要度の時点間の相関が一貫して強いこと、ま

た1年次を除いて大学生生活全般に関する変数と関連を持ちにくいことなどが考察されたが、ここでは1年次から4年次までの縦断的なデータに基づいて、その知見を前進させることを目的とする。

3.2. 方法

2004年度生を対象として、04年度の10月、05年度の10月、06年度の4月と10月、07年度の4月（以下では、それぞれ1年次、2年次、3年次前期、3年次後期、そして4年次と表記）に質問紙を用いた調査を行った。調査内容のうち、本研究が検討対象とするものは次の3変数である。

『大学生生活満足度』本学に入学して（本学の学生生活に）どの程度満足しているか、5件法により回答させた。

『大学生生活重要度』本学での4年間で自分の人生にとってどの程度重要なものであるか、5件法による回答を求めた。

『大学での友人関係重要度』本学での友人関係がどの程度重要であるかを5件法により回答させた。

3.3. 結果と考察

4年次の記述統計量を表3-1に示す（3年次までについては石崎ら(2007)を参照のこと）。t検定を用いて性差を検討したが有意差はなかった。また、1要因5水準（年次・時期）の分散分析を行ったが、3変数とも5時点間に差は見られなかった。

表3-1 記述統計量

	M	SD
大学生生活満足度	3.13	1.02
大学生生活重要度	4.19	1.05
友人関係重要度	4.44	.96

次に4年次の3変数間と過去の4時点の3変数との間の相関係数を表3-2に示す。

表3-2 相関係数

	1年次 (N=15)			2年次 (N=12~13)			3年次前期 (N=12~13)			3年次後期 (N=10)			4年次 (N=16)		
	(1)	(2)	(3)	(1)	(2)	(3)	(1)	(2)	(3)	(1)	(2)	(3)	(1)	(2)	(3)
4年次 (1) 大学生生活満足度	.24	.42	-.19	.77**	.36	-.16	.51	.48	.16	.82**	.44	.00	-	.66**	-.06
(2) 大学生生活重要度	.44	.67**	.03	.48	.38	.07	.61*	.82**	.46	.65*	.74*	.44	-	-	.51*
(3) 友人関係重要度	.50	.48	.30	.30	.30	.39	.11	.64*	.69**	-.02	.64*	.51	-	-	-

** p<.01 * p<.05

これまで中川ら(2006)と石崎ら(2007)で示された友人関係重要度の時点間の相関の一貫した強さが4年次の友人関係重要度においては見られなかった。また、1年次を除いて大学生生活全般に関する変数と関連を持ちにくいという傾向が示されていたが、ここでは大学生生活重要度との間に正の相関($r = .51$)がある。1年次において関連を持っていた、友人関係への意識と大学生生活全般に関する事柄は、2～3年次と学年を経て分化し、友人との付き合いとその他大学に関することは関連を持たない。しかし、4年次において友人関係を重要と認識する度合いは大学生生活を重要と認識する度合いと関わりを持つ傾向が見られた。

2年次頃より友人関係と大学生生活全般への意識は分化し、友人関係を重要と思うものは一貫して重要と、また重要と思わないものは一貫して重要ではないと認識する。これは特定の関係への満足度が関わると考えられる。そして4年次において友人関係重要度が大学生生活重要度と相関を示し、再び友人関係と大学生生活への認識が関連を持つに至る。しかし4年次の友人関係重要度は、過去の4時点間との関連においては3年次前期とのみ相関関係を示している。大学生生活4年間の後半において学生が新たな人間関係を経験し、それに対して重要と感じる程度の高さが大学生生活を重要と感じる程度と相関を示していると考えられる。

一方で、大学生生活満足度と重要度間には各時点で一貫した強い関連が見られ、他時点の満足度・重要度へ影響を与える。石崎ら(2007)で示された、入学当初の満足感が3年次前期までの満足感と関連するが3年次後期から相関を見せない傾向について、本研究でも同じく4年次の満足感への影響は示されなかった。4年次の満足感と重要度については3年次以降の認識の影響が強い。

これらは、入学への満足感から大学生生活全般の認識への影響力はほぼ3年次程度までは残るが、3年次以降から4年次にかけてはまた独自の認識を再構築している可能性を示唆している。また、満足感は、学生生活を大事と捉える認識を長期間もたすが、後の満足感を直接予測できるわけではない。むしろ重要度の高い認識が、長期間にわたる、学生生活を大事と捉える程度に影響を持っている。このことから、入学時の満足感はそのまま後の満足感を規定するのではなく、学生生活への意義を見出しやすくさせ、それに伴って4年次で

の満足感が刺激される可能性が示唆できる。また、入学時に大学へ感じている意義は、4年次の時点での満足感にも関連性を持っているが、同時に、4年次の満足感には3年次以降に再構築された認識が強い関わりを示す。

3.4. まとめと今後の課題

本研究では1年次から4年次までの縦断的なデータに基づいて、中川ら(2006)と石崎ら(2007)での知見をさらに検討することを主な目的とした。まず友人関係に関しては、大学生生活の後半において学生は新たな人間関係を経験し、その関係の大事さが学生生活全般の意義とも関わっている。また大学生生活への満足度と重要度に関しては、入学当初の大学生生活へ感じている意義の大きさは、後の大学生生活重要度にも影響を与え、3年次以降に再構築されると考えられる満足感にも影響している。初期の満足感は2～3年次の意義にまで影響力を持つが、直接的に後の満足をもたらず傾向は持たない。

本研究は上記の3変数の相関関係のみをもとに考察が行われており、因果に踏み込む研究報告を今後行う必要がある。また、大学生生活に関する事柄、クリティカルシンキング志向性、社会的スキル、職業志向性、自尊感情についての縦断データも蓄積されているので多角的な検討が可能である。内藤ら(2005)では性差による大学適応の様相の違いが考察されており、この点も続けて検討の必要がある。

3 節注

(1) 執筆担当：坂本 剛

4. 本学学生の国際性に関する意識についての調査結果⁽¹⁾

4.1. これまでの調査結果

今回の調査結果をもって、本共同研究を締めくくることになるが、この調査を開始するにあたって人間環境系学生の帰属意識と国際性をどのように関係づけて設問を作成するか大変当惑したというのが当初の所感である。調査期間中に学生の傾向や反応を見ながら試行錯誤し、追加した設問もあれば削除した設問もあり、縦断研究としては一貫性を欠いたものになったことは否めない。

けれども、本学でのカリキュラムは英語が必須科目であり、学生に国際性を問うたときにまず英語を連想するであろうと

いう予測をたて、英語に関する設問は全期間を通して行うことができ、この点は縦断調査ができたと考える。

次にこの調査に重大な課題を残した点は、2回目以降の調査報告でもたびたび指摘してきたことであるが、アンケート回収率の著しい低下である。第1回目では約7割の回答を得ることができたにもかかわらず、学年があがるにつれ10ポイント近い低下を続け、最終年度では約22%しかない(表4-1)。これまで回答率過半数を維持していたⅡ期生ですら、30%台である。特に、留学生の回答者がほとんどいないことが、回収率の低下と大きく関わっている。

このような不十分な調査結果となった背景には、「文学」や「医学」のように、入学前から自分が学ぶ学問分野について知識をもっている学部と比べ、「人間環境」のイメージを学生自身が曖昧なまま入学してきた点が、理由の第一点としてあ

げられる。さらに、本研究が目的としていた、「人間環境系」の学生に、大学で何を学び、卒業後はどのように生きていくかのイメージ確立に関して、本共同研究が学生へのフィードバックを行えず、学生に対し、自己の確かな足場を与えることができなかったという点が第二の理由である。

同時に、明確な専門性アピールすることが難しい学問領域においては、学生が己をアイデンティファイできないという問題が生じるということも、高等教育が大衆化し、学問領域が多文化的になっている現在、日本にある多数の大学に現れる普遍的な現象として指摘することは、大学教育を考える上で意義あることであろう。

まず、英語に関する意識についての調査結果を以下にあげる。

表4-1 調査回答率（2007年）

2007 I 期	提出	2007 II 期	提出
全体(57)	13	全体(88)	34
	22.81%		38.64%
内留学生(17)	2	内留学生(29)	3
	3.51%		10.34%

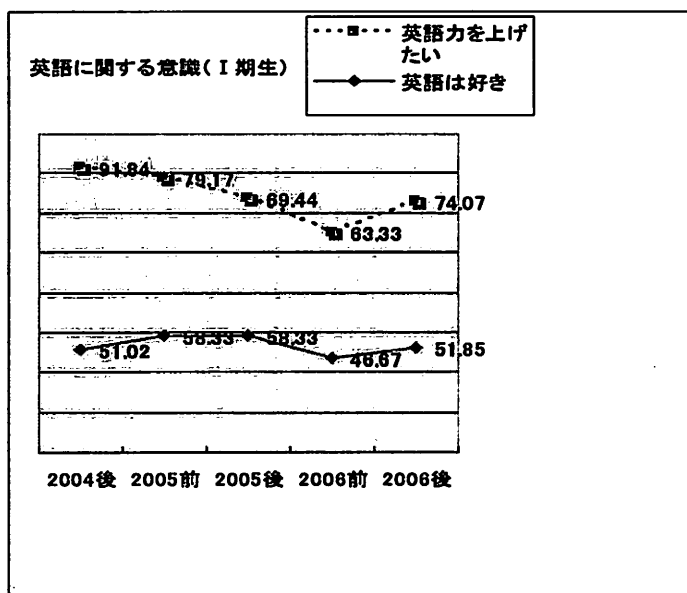


図4-1 英語に関する意識 (Ⅰ期生) (2)

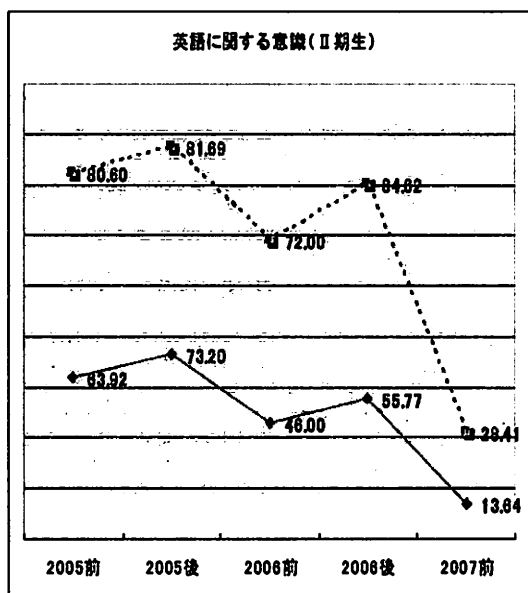


図4-2 英語に関する意識 (Ⅱ期生)

図4-1に関してであるが、調査は2007年度が最終となるため、卒業を控えているⅠ期生に対してはこれまでと質問内容をかえ、達成度の意識を問う内容とした。したがって、英語に関する意識はⅡ期生のみに対して行った。

回収率が低下したなか、調査に協力してくれたⅡ期生は本学の学生のなかでも、まじめに講義に出席し、学外での活動にも積極的に参加している学生である。また、調査を行った期間は、Ⅱ期生にたいする就職ガイダンスが開始され、就職試験対策の一環である、基礎学力を問う適性検査・模擬試験が行われ、英語力向上を切実に感じる時期である。それにもかかわらず、英語力を上げたいという意識が低下し、「英語は

好きである」と回答した学生はそれをさらに下回っていることが調査結果で明らかとなった。

4.2. 本学学生の国際性に関する意識

国際性に関する設問は選択式の調査を行い、2005年度後期から記述式の設問を追加した。2007年度の調査では、卒業年度になるⅠ期生に対しては、本学での学修で何を学んだかを明確にする目的で、記述式の調査のみを行った。記述式の質問に回答した学生は、どの年度も過半数が白紙で提出してきたが、自分の考えを記入した学生の回答が表4-2である。

表4-2 国際性とは何か（Ⅰ期生）

国際性とは何か（Ⅰ期生）			
2005 後	2006 前	2006 後	2007
外国語能力の向上	英語力	英語	英語力
国際交流	自国の文化に誇りを持ち、他国の文化も尊重する	生きる力	自国の文化に誇りを持ち、他国の文化も尊重する
国際平和、国際協力	国際交流	国際交流	助け合い
コミュニケーション	他国との類似点や差異を理解する	他国の価値観を知る	他国との交流
世界が一つになる	世界が豊で平和である	外国語能力と教養	異文化理解
	自国の文化を理解し、他国の文化も尊重する	母国と外国双方の知識があること	言語コミュニケーション
	広い視野	国と国のつながり	人との関わりに必要なもの
	友好	自国をアピールした国の文化を取り入れる	
	他者を理解する心	他国への理解	
	自国の文化への誇り	自国を知ること	
	国と国とのつながりと相互理解	自国を理解した上で他国を知ること	
	どの原語でも話せること	必要なもの	
	現代人に必要なもの	国際的に通用できること	
		世界をまとめる力	
		諸国が共通認識にいたること	

表 4-3 国際性とは何か（Ⅱ期生）

国際性とは何か（Ⅱ期生）			
2005 後	2006 前	2006 後	2007
世界友好	国際交流	国際交流	語学力 外国人とコミュニケーションが取れること
経済 開放	異文化接触	貿易	
グローバル化	世界情勢を知る	国際支援	
居・食・住の変化	語学力	世界的視野	
国連	相互理解	国家という枠にと られない	
各国の交流	わからない	他国のことを考えること	
世界中の国々をひとつにする	友好	コミュニケーション力	
異文化コミュニケーション	他国の理解	協調性	
他国籍の人々とのコミュニケーション	自国の理解の上 に成り立つもの	インターナショナル	
人類平等	世界に共通すること	英語力	
共同性	自国を理解し、他国 を理解する	多言語、異文化理解	
留学	差別のない考えをもつ	ボーダーレス	
英語	コミュニケーション力		
先進技術	異文化コミュニケーション		
政治			

表 4-2 から言えることは、4 回の記述式設問にたいする回答に白紙回答が回を重ねるごとに増えていること、回答にほとんど変化が見られないことである。特に、「英語力」・「国際交流」・「異文化理解」に重複回答が見られた。

表 4-3 のⅡ期生と比較すると、Ⅰ期生が類語反復的回答、抽象的回答をしているのに対し、Ⅱ期生は、「コミュニケー

ション力」・「留学」・「貿易」・「先進技術」といった、本のタイトルを拝借した回答や具体的な回答が見られるという差異がある。

なお、参考資料として、選択式設問にたいするⅡ期生の回答を以下に記載する。

表 4-4 国際性の向上に必要だと思うもの（Ⅱ期生 2007 年）

国際性の向上に必要だと思うもの							
	母国語能力	自国の歴史	自国の文化	自国の芸術	外国語能力	その他	その他
全体	18	17	6	4	17	2	0
	28.13%	26.56%	9.38%	6.25%	26.56%	3.13%	0.00%
内留学生	1	1	1	0	1	0	0
	25.00%	25.00%	25.00%	0.00%	25.00%	0.00%	0.00%

表 4-5 国際性を高めるためにできると思うこと（Ⅱ期生 2007 年）

国際性を高めるためにできると思うこと								
	留学生への 学業支援	留学生への 生活支援	青年海外協 力隊への参 加	ボランテ ィア	教養を深 める	外国語能 力	外国の歴 史・文化理 解	その他
全体	3	4	5	7	10	15	15	0
	5.08%	6.78%	8.47%	11.86%	16.95%	25.42%	25.42%	0.00%
内留学 生	1	1	1	1	0	1	0	0
	3.33%	3.33%	3.33%	3.33%	0.00%	3.33%	0.00%	0.00%

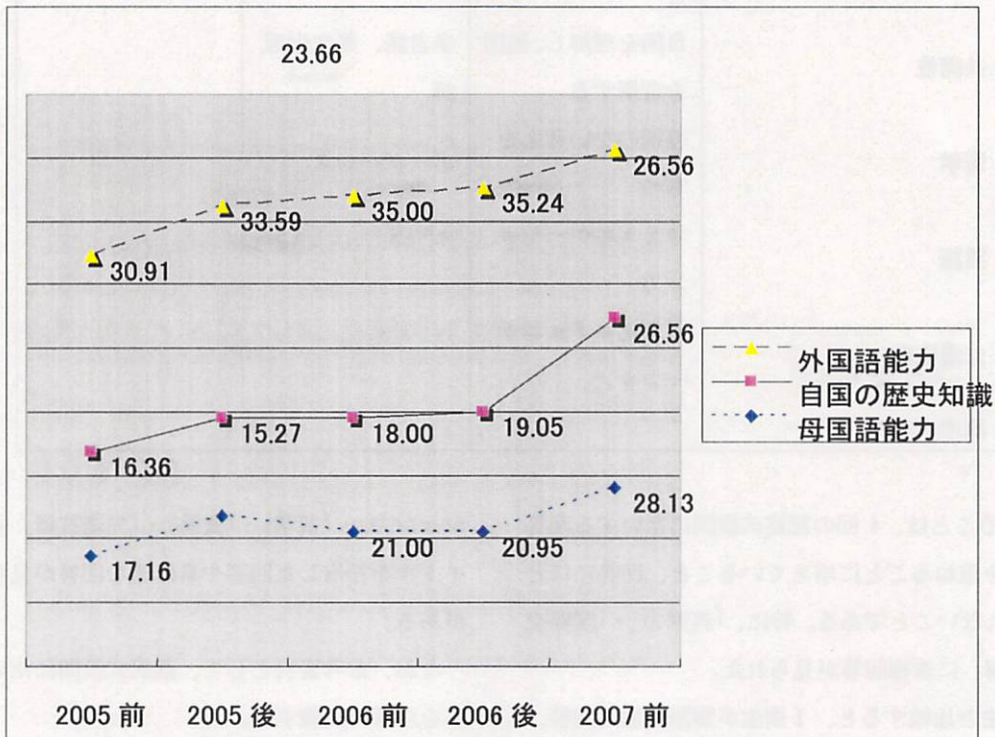


図 4-3 国際性の向上に必要だと思うこと（Ⅱ期生 2007 年）

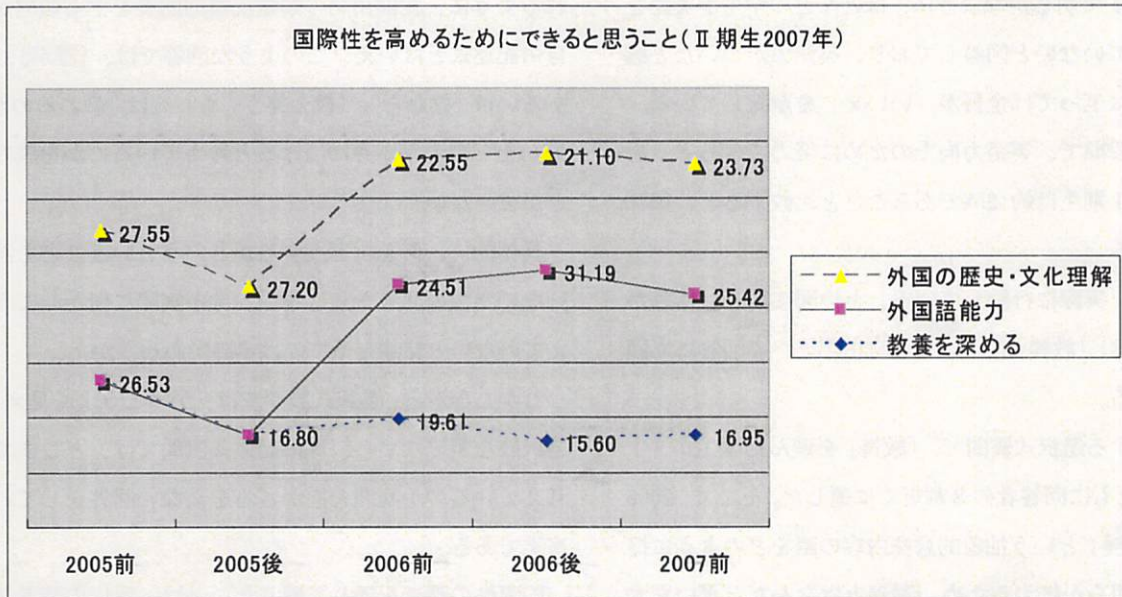


図 4-4 国際性を高めるためにできると思うこと（Ⅱ期生2007年）

過去の調査から⁽³⁾、Ⅰ期生はⅡ期生に比べ、自分自身でできる事柄に外国語能力（英語力）の向上を第一に選択する率が高い傾向にあった。

それでは、Ⅰ期生は、自身をどのように評価したかを以下に記載する。

表 4-6 Ⅰ期生の自身にたいする評価

	英語をよく勉強した		本学で英語力がついたと思う	
	はい	いいえ	はい	いいえ
全体	1 7.69%	12 92.31%	0 0.00%	13 100.00%
留学生	0 0.00%	2 100.00%	0 0.00%	2 100.00%

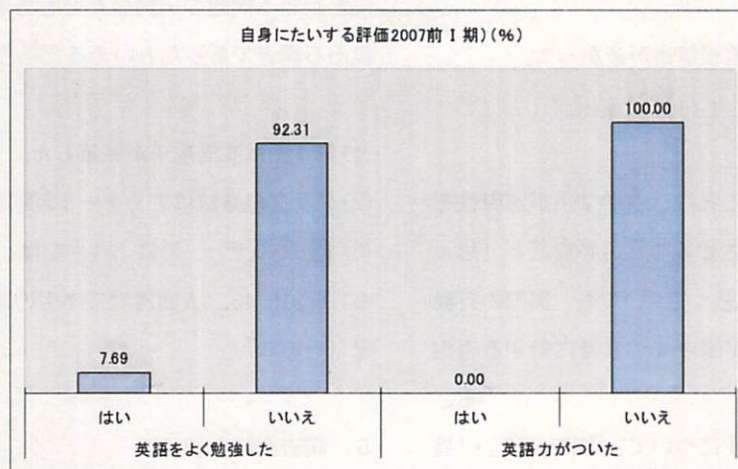


図 4-4 Ⅰ期生の自身にたいする評価

表 4-6、図 4-4 で明らかのように、ほとんどの学生が英語をあまり勉強していないと回答しており、英語力がついたと感じている学生に至っては全員が「いいえ」を選択している。過去の選択式設問で、英語力向上のために努力できると「思う」と答えた I 期生は約 25%であることと比較すると、興味深い対照である。

「思う」と「実際に行動している」との間に著しい落差が見られる傾向は、「教養」についての自由記述への回答にも顕著に表れている。

国際性に関する選択式設問で、「教養」を選んだ学生が、I 期生・II 期生ともに回答者の 3 割近くに達した。そこで、2006 年度から、「教養」という抽象的意味内容の語をどのように捉えているかを明らかにするため、「教養とはなんだと思いますか」という自由記述式設問を追加した。この設問も、同じく自由記述式で問うた「国際性とはなんだと思いますか」という問いと同様、白紙回答が多く、単語・文章表現で回答した学生は 10 名前後にとどまる。

「教養」をどう考えているかについては、I 期生・II 期生ともに、ほとんど同じ単語を記載しており、それを次に紹介する。

- ・ 教養養うもの
- ・ 教養教わるもの
- ・ 知識
- ・ 勉強
- ・ 生きていくのに必要なもの
- ・ 心の豊かさ

「教養養うもの」・「知識」に重複該当が多かった。

4.3. 国際性調査をふりかえって

調査結果から明らかになったことは、本学学生が国際性を身につけるために英語力を向上させることが必要だと「思っている」ことである。しかし、「思っている」いても、実際の行動につながっておらず、その結果が図 4-4 の自身に対する否定的な評価に現れている。

自由記述に関しても、【国際性】について、「国際交流」・「異文化理解」・「コミュニケーション」、【教養】に至っては、「教養養うもの」・「教養教わるもの」・「知識」などの回答に見ら

れるように、質問用語の類語反復的回答をする傾向が強い。自由記述式とはいえ、このような回答では、「誰が」、「誰を」あるいは「誰から」、「教養養う」もしくは「教わるのか」、「知識」をどのように身につけると考えているのかを読み取ることができない。

具体的に、何を、どうするかというということを記入していない学生の回答から、学生自身が実際に何かしようとは考えていないと結論を下すのは早計であろうか。

しかしながら、選択式設問では「かつこうよく見えそうな」選択肢を選びながら、自由記述式設問では、どこまで真剣に考えているのか疑問を抱かざるをえない回答をしているのも事実である。

国際性の調査を通じて感じたことは、現代の若者気質のようである。すなわち、必要だとは「思う」けれども、現実問題として労苦をとまなう努力をすることから逃げる、例えば、直接対話での質問に対して、「別に、特にそうしたい訳じゃないから」と、正面から向き合うことを避けるという性向である。

また、自ら暗中模索し、みっともなくとも、あがきながら前に進むことより、誰かが便利な知恵袋を与えてくれるのを、ただ待ち続けるという具合である。

このような若者気質は、現代の若者の学問的好奇心が希薄であること、そして、そのような若者の知的好奇心を刺激し、意欲を抱かせることが急務となっている、高等教育全般の課題にかかわる事柄である。

多くの課題を残した共同研究であるが、現代日本社会全般にかかわる問題の一部なりともあきらかにできた点では、意義ある調査であったといえるだろう。

(1) 第 4 節は高橋陽子が執筆した。

(2) グラフの数値はアンケート回答数における選択率である。

(3) 過去のデータについては、環境経営研究所年報 vol. 6pp19-45、「人間環境系学生の適応過程に関する縦断的研究 (その3)」

5. 調査全般を通じて

本研究は、4 年間の縦断的データをもとにして、大学生の適応過程を分析したものである。本稿では各節がそれぞれ独

立した分析と論考を行っている。

1節においては、「人間環境に対する一体化された認識」が十分に確立されていないことから、学際性の実現に向けた課題について考察が行われた。一方で2節においては「領域」へのイメージ形成ができつつあるが、同時に就職との直接的な関わりを見出しにくくさせていると指摘する。このことから1年次と3年次における教育配慮の必要性について議論が行われた。続く3節でも、3年次において、友人関係が変化する可能性と大学生活満足感の認識の仕方が変化する可能性が示唆された。また、入学当初に感じている大学生活への意義が後の大学適応へ与える影響についても考察された。4節においては、国際性や英語力についての態度と実際の行動の関連の低さから、現代青年の好奇心や意欲の持ち様について考察が行われた。

*本研究は名古屋産業大学・名古屋経営短期大学環境経営研究所より助成金を得ている。ここに記して謝意を表したい。